様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３３２０１６４

研究課題名（和文）近代ヨーロッパを中心とする空間的移動の実態と移動の論理に関する比較史研究

研究課題名（英文）A comparative historical study on the practices and logics of migration in modern European history

研究代表者
北村　暁夫（Kitamura, Akeo）

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：００１８６２６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　14,100,000円

研究成果の概要（和文）：　17世紀から20世紀前半までの近代ヨーロッパにおける、さまざまな形態の移動（国内移動／ヨーロッパ諸国間の移動／大陸間移動、経済的な移民／政治亡命／難民）を対象として、移動する人々を移動実践の行為主体として捉えた上で、移動の動機、移動先や移動手段の選定、移動後の生活の構築、アイデンティティ変容などの諸点を比較検討することにより、移動をめぐる論理の類型化を試みた。
　個別事例を集積し、それを移動の論理の諸類型のなかに置く作業を繰り返すことで、移動実践においては循環型（一時的）移動／ 直線型（永住的）移動という視点が重要であることや、女性の役割をいっそう重視する必要があることが知見として得られた。

研究成果の概要（英文）：This project attempted to analyze the logic of European migration between 17th century and the first half of 20th century, focusing on the various types of migration (internal migration / intra-european migration / intercontinental migration, economic migration / political exile / refugees etc.) and recognizing the migrants as actors who chose to migrate.
By accumulating the individual cases about the European migrants and putting insistingly these cases into the types of the logic of migration, it reached to the conclusion that it is very important to distinguish circular (temporary) migrations from linear (permanent) migrations, and it is necessary to emphasize the crucial role of feminine migrants.

研究分野：ヨーロッパ移民史　イタリア近現代史

キーワード：移民　近代ヨーロッパ　空間的移動　移動の論理　比較・交流史　ジェンダー

１．研究開始当初の背景

（１）グローバル化の進展により、人間の移動がいっそう頻繁になるとともに、歴史学の分野においても人間の空間的移動をめぐる研究は着実に進展を遂げてきた。近代世界（とくに 19 世紀を中心に）における空間的移動において重要な位置を占めるヨーロッパに関する研究についても、同様のことが言える。けれども、近年の移動をめぐる歴史研究は、国境を越える移動としての移民に関する研究を中心にしており、しかも移民によるアイデンティティ変容やエスニック・グループの形成、移民集団の同化、統合、排斥といったテーマに著しく傾斜する傾向にあると思われる。もちろん、こうした一連のテーマは現代世界に生きる我々にとってきわめて今日的な課題であり、歴史研究として深く探求するに値するテーマであることは言うまでもない。研究代表者も、これまで科学研究費補助金を受けたいくつかの課題をはじめ、同種のテーマに取り組んできている。しかし、空間的移動という現象は国境を越える場合に限定されるわけではなく、またこの現象をめぐる論点がエスニック・グループの形成や同化／統合といった問題に限定されるわけでもない。

（２）研究代表者はかつて「ヨーロッパ移民史研究の射程」（『歴史評論』625 号、2002 年）という論考において、ヨーロッパ移民史研究の確信のために必要とされる論点を、次の三つに整理した。

①　移民を移動という行為を選択肢実践する行為主体として捉え、彼らが移動を実践する過程をミクロな視点から辿るという研究の方法が必要とされていること。

②　移民という概念と、それと隣接する諸概念（亡命、難民、ディアスポラ）との差異が、かつて考えられていたほど自明ではなく、概念そのものの見直しが必要とされていること。

③　移民の実践を通して「エスニック・グループ」や「人種」が構築される過程を明らかにする作業が求められていること。

現在の研究状況が抱える問題は、一番目、二番目の論点を十分に検討しないままに、三番目の論点に関心を集中させているという点にある。人々がいかなる動機で移動するにいたったか、どのような方法、手段を用いて移動したのか、移動していく人々に対して地域社会や国家はどのように対処したのか、といったことを移動者の論理に即して解明したうえで、移動先において人々がいかなるコミュニティを形成し、そのなかで自らのアイデンティティをどのように変容させていったのかという問題を論じるべきであるのに、研究の現状はそれとは逆の方向を示していると思われるのである。

（３）また、近代における国民国家の枠組みのもとでは、移動によって国境を越えるかどうかが非常に大きな意味を持つとはいえ、移動者の論理という観点から見たときには、国内移動と国外への移動の間に共通する側面も数多く存在する。しかし、国境を越える移動（いわゆる移民）にのみ関心を集中させることによって、こうした視点は欠落していくことになる。さらに、経済的な理由による移動と政治的、社会的な理由による移動とは、その実態においてしばしば重なり合ったり、密接な連携を伴っていたりする側面があるにもかかわらず、今までの多くの研究ではその点が十分に議論されてきたとは言い難い。

２．研究の目的

（１）以上のような研究状況に対して、本研究は 17 世紀から 20 世紀前半までの近代ヨーロッパにおける、さまざまな形態の空間的な移動（国内移動／ヨーロッパ諸国間の移動／大陸間移動、経済的な移民／政治亡命／難民）を対象として、移動する人々を移動という行為を実践する行為主体として捉えたうえで、移動をめぐる論理を明らかにすることを目的としている。

（２）上記の作業を通して、参加者が研究対象とする個別の諸事例が近代ヨーロッパにおける移動の全体的なコンテクストの中でどのような位置にあるのかを明らかにするとともに、諸事例の間の相互的な関係、位置取りを明らかにすることも、本研究の重要な目的である。

３．研究の方法

（１）研究の出発点は、参加者各人が自らの専門とする地域における移動のさまざまな事例を提示することにある。この作業では、さまざまな移動の区分をいったん取り払い、それぞれの事例に見られる移動の基本的な論理（移動にいたる経緯、移動先の選定、具体的な旅の行程、移動先での生活の構築）をあぶりだしていく。

（２）ついで、具体的な事例を通して提示されたさまざまな移動の論理をパターン化し、分類・整理する作業を行う。さらに、移動の論理に基づいて分類された諸類型が、地域社会の経済構造や地域・国家の権力構造とどのように連関しているかを明らかにしていく。この一連の作業を通じて、国内移動／国外への移動、経済的な理由による移動／政治的な理由による移動、といった二分法的な理解では見ることのできなかった移動に関する新たな知見を獲得していく。

（３）最後に、近代ヨーロッパの空間的移動の分析から得られた知見を、アジアやアフリカにおける同時期の空間的移動に関する分析と接合する作業を行う。これにより、空間的移動を世界史的な次元でより深く理解す

ることを目指す。

４．研究成果

（１）参加者が各人の対象とする個別事例を提示し、それらを類型化する作業を行った。参加者の個別テーマは以下の通りである。

・国内移動の事例　①青木恭子：19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのロシアを対象として、ヨーロッパ・ロシアからシベリアに向けて移動した農民の移動の論理を分析した。その結果、先遣人がもたらす情報が農民の移住先に強い影響を与えていること、農民は母村で自ら携わる農作物を継続的に行うことのできる移住先を好んだこと、農民の移住先の選択はしばしば政府の政策が想定した場所とは異なることなどを明らかにした。

・ヨーロッパ内の移動　①北村暁夫：1908 年に南イタリアで起きた大地震により生じた住民の移動にみられる論理を分析した。その結果、避難者は震災以前に移民した家族・親族を頼ってエジプトやアメリカ合衆国へ移住する傾向にあることを明らかにした。

②木村真:19 世紀から 20 世紀初頭にかけて、ブルガリアのタルノボ地方出身の野菜栽培人によるバルカン・ハンガリー諸地域への移動を対象として、彼らの移動の論理を分析した。その結果、野菜栽培人の持つ灌漑能力や治水能力が移動先の社会から求められていたこと、彼らはそうした需要に対応する形で移動していったことが明らかになった。

③平野奈津恵：19 世紀後半から 20 世紀初頭にベルギーから北フランスの炭鉱地帯に移民した炭鉱労働者とその家族を対象として、彼らの移動の論理を分析した。その結果、ベルギー人移民は自らの炭鉱労働者としての経験を生かすためにフランスの炭鉱地帯に移住したこと、フランス人労働者はフランスで徴兵の対象とならないベルギー人労働者に対して差別的な意識をしばしば抱いていたことが明らかになった。

・大陸間の移動　①一政史織：20 世紀初頭のアメリカ合衆国におけるクロアチア系移民と日系移民を対象とし、両者の移民コミュニティの形成過程を比較検討することにより、移動の論理が移民集団の民族・国家像の形成にどのような影響を与えたかを分析した。その結果、民族・国家像の形成には、アメリカ社会の側で誰をアメリカ市民として許容するかという点が深く関わっていることが明らかになった。

②杉浦未樹：17 世紀から 18 世紀にかけてオランダ領として発展した南アフリカのケープ植民地を対象として、オランダ人入植者の移動の論理と資産の形成と維持をめぐる家族戦略を分析した。その結果、資産形成・維持において女性の存在が大きな役割を果たしており、一定数の女性を確保することが植民地にとって重要であったことが明らかになった。

③田中ひかる：19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてロシア帝国領内からアメリカ合衆国に移民したアナーキストたちを対象として、彼らの移動の論理を分析した。その結果、ロシア帝国領内では強い政治意識を持っていなかった人々が移民という行為を通してアナーキストとして覚醒していく過程が明らかになった。

④山本明代：19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてハンガリー王国からアメリカ合衆国に移民した複数のエスニック集団を対象として、彼らの移動の論理とアメリカにおけるコミュニティ形成について分析した。その結果、移動の過程においてそれまで未分化であった集団がエスニックなラインに沿って編成されていくことが明らかになった。

（２）以上の個別事例の提示をもとに、研究会活動を積み重ねるなかで、移動の論理をめぐる類型化、理論化を図った。まず得られたのは、移動の歴史を概観する際には、各地域の移動をパッチワーク的な処理によって総合するという方法は有効ではなく、統一した視点に基づいて全体を描ききる方法が有効であるということであった。また、移動の論理を考察する際には、循環型（一時）の移動と直線型（永住）の移動という類型が重要であることが確認された。こうして得られた成果を、マトリックスの形でモデル化することにした。

（３）研究成果を広く発信することと国際交流の進展を図ることを目的として、2012 年度と 2013 年度の 2 回に渡り、国際シンポジウムを開催した。それぞれ、レオ・ルカッセン氏（オランダ）とダナ・ガバッチャ氏（アメリカ合衆国）というヨーロッパ移民史研究における泰斗であり、国際的に知られた研究者を招いた。ルカッセン氏の講演では、16 世紀以降のヨーロッパを中心とする空間的移動において、兵士と船員の占める比率が高いことが指摘された。また、ガバッチャ氏の講演では、移民の「女性化」ということが近年しばしば指摘されるが、実際には女性の移民は 16 世紀から常に一定の比率で存在し、時には数量的に男性を凌駕する時期もあったのであり、20 世紀末になって初めて移民が「女性化」したわけではないことが指摘された。こうした両氏の指摘は、本研究がこれまで十分に認識してこなかった点であり、本研究の視野を広げるうえで、きわめて重要であった。

（４）具体的な事例に基づいて移動の論理を類型化、理論化する作業は、マトリックスの作成をもって一応の完成を見ることとなった。しかし、他方で本研究には、いくつかの課題も残されている。最も重要な課題は、本研究の趣旨が移動の論理の理論化にあったために、移動の実態を記述する際の方法について、十分な考察、分析を行ってこなかった

ことにある。歴史叙述においては、語りの方法を洗練することが不可欠であり、とりわけ移動する人々の具体的な姿を提示する際には、魅力的な語りが必要である。この点については、成果を一冊の書物にまとめる際の課題として、さらなる考察を深めていきたい。また、兵士や船員の移動、女性の移動については、本研究では必ずしも十分に扱うことができなかった。とりわけ、女性の移動および移動とジェンダーとの関わりについては、新たに研究プロジェクトを立ち上げ、数年の期間をかけて本格的に分析する必要があるという認識にいたった。（これは、平成 27 年度に採択された基盤研究（B）「近代ヨーロッパを中心とする女性の空間的移動とジェンダーの変容に関する比較史研究」（研究代表者：北村暁夫、課題番号 15H03260 ）へと展開している。）

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）

① 北村暁夫、コメント：イタリアにおける「移民」の経験、東京大学アメリカ太平洋研究、査読有、14、2015、71―75

② 青木恭子、Организованое ходачестьо（組織された先導人派遣）―20 世紀初頭の帝政ロシアにおける移住政策の転換、富山大学人文学部紀要、査読無、62、2015、141―162

③ 一政史織、第一次世界大戦期におけるアメリカ化と人種像－クロアチア系移民と日系移民を中心に、 英語英米文学、査読無 55、2015、135―154

④ 青木恭子、帝政ロシア国内移住にみる移動の論理‐移住者の出身地と移住先の分析から、富山大学人文学部紀要、査読無、60、2014, 1－26

⑤ 北村暁夫、イタリアを出た移民たち－19 世紀半ばから 20 世紀半ばまでを中心に、星美学園短期大学　日伊総合研究所報、査読無、9、2013、59‐63

⑥ 一政史織、「越境する人々－移民と難民を中心に」（石田信一・柴宜弘編『クロアチアを知るための 60 章』明石書店）、査読無、297‐300、2013 年

⑦ 田中ひかる（Hikaru Tanaka） The Reaction of Jewish anarchists to the high treason incident, in Masako Gavin and Ben Middleton(eds.), Japan and High Treason Incident, Routledge, 査読無、80-88, 2013 年

⑧ 杉浦未樹 (Miki Sugiura)、“Space, Culture, and Regeneration of Cities in History: From the Viewpoint of International Comparison of Territory and Infrastructure”, Society of Urban and Territorial History (ed), Proceedings of the International Symposium in Tokyo, 3–4 December ,2012　査読無、20-25、2012 年

⑨ 杉浦未樹(Miki Sugiura)、"Tailors and Secondhand Circulation", Paper presented at Session ”Second Hand Circulation in Global Perspective” Session Co-Organizer and Presenter,WEHC Stellenbosch, July 14th, 2012.

⑩ 杉浦未樹(Miki Sugiura)、 “Remade, Used, and Rags: Three Layered Distribution Systems of Second-hand Clothing in Early Modern Edo”, Sugiura, M. and Shinya Kobayashi Paper presented at Conference “Consuming Textiles Through Their Uses and Reuses” in National Museum of Ethnology (Minpaku), Osaka, February 8th, 2012.

⑪ 田中ひかる、「日本とアメリカのアナーキストによる国境を越えた交流と連帯－山鹿泰治とボ　リス・イエレンスキーの往復書簡に見る「太平洋を越えた支援」（１）1948～51 年」、『初期社会　主義研究』、査読無、24、119－137、2012 年

⑫ 田中ひかる、「ロシアで投獄されたアナーキストを救援するための組織とその活動について－ニューヨークのアナーキスト赤十字を中心に　1905～1920 年代」、査読無、『歴史研究』、49、47－88、2012 年

⑬ 青木恭子、移住者の帰郷－帝政末期アジアロシア入植事業の抱える問題、富山大学人文学部紀要、査読無、54、2011、69‐92

⑭ 一政史織、恋愛を書くこと：20 世紀はじめの『日米新聞』における女性投稿短歌、英語英米文学、査読無、51、2011、83－99

⑮ 杉浦未樹(Miki Sugiura)、 “Theoretical Frameworks for Distribution and Transport of Gateways and Hinterlands” in Editing Meetings “*Gateways and Hinterlands in Europe, 1400-1900”* ,Ca’ Foscari University

of Venice, Department of Management, 28-29th January 2011、査読無、2011 年

⑯ 田中ひかる、「ロシア出身のユダヤ系女性移民アナーキストについての考察－ジュリア・シンガー・グッドマンの生涯およびアナーキスト赤十字の活動」、査読無、『歴史研究』、48、97－138、2011 年

〔学会発表〕（計 10 件）

① 青木恭子、帝政ロシア国内移住者の移動の論理と移住政策－移住者の出身地と入植地の分析から、第 64 回日本西洋史学会、2014 年 6 月 1 日、立教大学（東京都豊島区）

② 平野奈津恵、19 世紀フランスにおけるベルギー移民と差異の創出－北仏炭鉱都市の事例をてがかりに、第 64 回日本西洋史学会、2014 年 6 月 1 日、立教大学（東京都豊島区）

③ 田中ひかる、ロシア出身のユダヤ系移民アナーキストによるアメリカ合衆国における活動　1905～1920－移動／移民と思想／運動形成の関係、第 64 回日本西洋史学会、2014 年 6 月 1 日、立教大学（東京都豊島区）

④ 杉浦未樹（Miki Sugiura）、Tracking Water, Friesland's 18-19th Century Urban Network and Waterway Transport, VI Associazione Italiana di Storia Urbana congress, 2013 年 9 月 12 日、University of Catania（イタリア、カターニア）

⑤ 北村暁夫、ガリバルディと現代イタリア、星美学園短期大学日伊総合文化研究所公開講演会（招待講演）、2013 年 7 月 20 日、星美学園短期大学（東京都北区）

⑥ 山本明代、アメリカにおけるハンガリー王国出身の移民コミュニティと国民化、史学会第 110 回大会公開シンポジウム、2012 年 11 月 10 日、東京大学（東京都文京区）

⑦ 杉浦未樹（Miki Sugiura）、Tailors and Secondhand Circulation, XVIthe World Economic History Congress, 2012 年 7 月 14 日、Stellenbosch University(南アフリカ共和国、ステレンボシュ）

⑧ 杉浦未樹、均分相続下の商家における女性－17、18 世紀のアムステルダムにおけるワイン商の成長を事例に、東大経済史研究会例会、2012 年 5 月 8 日、東京大学（東京都文京区）

⑨ 田中ひかる、アナーキスト赤十字による活動　1905-1920 年、九州西洋史学会大会、2011 年 10 月 15 日、九州大学（福岡県福岡市）

⑩ 山本明代、1926 年パセーク・ストライキにおける東欧移民労働者の実践と支援活動、九州西洋史学会大会、2011 年 10 月 15 日、九州大学（福岡県福岡市）

〔図書〕（計 7 件）

① 杉浦未樹　他、刀水書房、国家の終焉－特権・ネットワーク・共生の比較社会史、2015、352

② 山本明代　他、彩流社、つながりと権力の世界史、2014、232

③ 山本明代、彩流社、大西洋を越えるハンガリー王国の移民－アメリカにおけるネットワークと共同体の形成、2013、362

④ 山本明代　他、昭和堂、ハプスブルク史研究入門、2013、311

⑤ 北村暁夫　他、ミネルヴァ書房、近代イタリアの歴史－16 世紀から現代まで、2012、280

⑥ 一政史織、木村真　他、山川出版社、東欧地域研究の現在、2012、366

⑦ 山本明代　他、風媒社、反響する文学、2011、264

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

ホームページ等

http://www.euromigration.jp

（近代ヨーロッパを中心とする空間的移動の実態と移動の論理に関する比較史研究）

６．研究組織

(1)研究代表者

北村暁夫（KITAMURA, Akeo）

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：00186264

(2)研究分担者

青木恭子（AOKI, kyoko）

富山大学・人文学部・准教授

研究者番号： 10313579

一政史織（ICHIMASA, Shiori）

中央大学・法学部・准教授

研究者番号：20512320

木村真（KIMURA, Makoto）
日本女子大学・文学部・学術研究員
研究者番号：20302820

杉浦未樹（SUGIURA, Miki）
法政大学・経済学部・教授
研究者番号：30438783

田中ひかる（TANAKA, Hikaru）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：00272774

平野奈津恵（HIRANO, Natsue）
日本女子大学・文学部・学術研究員
研究者番号：60634904

山本明代（YAMAMOTO, Akiyo）
名古屋市立大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：70363950

⑶連携研究者　なし